

## 第四章 解釈学と意味論

リクールの場合（意味から指示への運動としての解釈）

柴田正良

## 第4章 解釈学と意味論

### I 解釈概念の限定

現代における解釈学が、「いわゆる『精神科学』の域を越えてさまざまな分野に拡散し、共通分母を見出すことが不可能なほどの混沌とした状況を引き起こしている」<sup>(1)</sup>のであれば、解釈学一般と意味論一般の関係を論ずることは、最初から実りなき企てとならう。それゆえ、私は、たとえ考察の歩みがその出発点となる前提の修正を余儀なくするものであるにせよ、ある種の解釈概念の限定をあらかじめ確保しておかねばならない。この限定は、まず第一に、直接の理解 (literal understanding) と解釈 (interpretation) との対立軸によって表わすことができる。この暫定的な対立によって意味されているのは、解釈の理論を言語習得の次元を扱う言語学理論から遠ざけ、それから相対的に独立させることである。それゆえ、クワインの根源翻訳 (radical translation) およびデイヴィッドソンの根源解釈 (radical interpretation) の次元からこ

での主題を遠ざけることもまた、意図されている。このことは、直観的には、われわれの日常会話の大部分で、例えば、挨拶の言葉や店員の説明や標識の指示といったものに関して、何らの解釈作業もなしに言わば直接の理解が可能である、ということの意味している。しかし、もちろん、この暫定的な対立は、最終的には理解一般の構造の解明をめざす解釈学の可能性を、あらかじめ排除するものではない。私の意図は、理解といういわゆる解釈学的循環構造の中へ足を踏み入れる手がかりを確保することにある。したがって、この暫定的対立の次元での解釈は、直接的な理解（それが何であれ）からわれわれを隔てる何らかの距離（distance）を克服する作業に他ならない。

しかし、この克服作業が、たんなる心理的な次元での親和性の回復しか意味しないのだとすれば、解釈の理論は、せいぜいのところ他者の心的生への直接の参入というロマン主義的理念に支配されざるを得ない。それゆえ、私がここで解釈概念に与える第二の限定は、ロマン主義的理解と解釈という対立軸によって示すことができる。このことは、ある種の意味論的条件とともに本質的に発生する、直接的理解からの隔りのみと同時に解釈の可能性の条件である、ということの意味している。したがって、これらの限定の下での解釈学は意味論の終った地点からその歩みを始めることになり、本稿での課題もその限りでの解釈学と意味論の関係を明らかにすることにある。「同時に疎隔（Verfremdung, distanciation）はまた解釈の条件となる」<sup>(2)</sup>と述べるP・リクールの解釈概念こそ、私がここで検討する中心主題であり、それを通して解釈とは何かを考えたい。

しかし、また、ここで主題的に扱うことのできない解釈概念の側面についても、直ちに一言述べておかねばならない。それは、先ほどの第一の限定に部分的に關係した、言うなれば解釈概念の批判機能の側面である。第一の限定で、私は、極めて漠然とした仕方で、解釈の対立項たる直接の理解の存在を前提したが、このことはさほど自明の事柄ではない。なぜなら、解釈のモデルとしてしばしば引き合いに出される精神分析的な状況が明瞭に示しているように、言語の当の使用率たちに隠された力によって、意味論的なレベルでの何らかの歪みがコミュニケーションの中に発生している可能性があるからである。しかも言語が社会的に容認された規約によって支配されていることを考えるなら、構造的な歪みがコミュニケーション状況一般のなかで真理の仮象 (Schein der Wahrheit) を生みだしている恐れが十分にある。したがって、一旦、意味論から自律的に展開された解釈の理論は、その復路で意味論の病理学として真理の再発見という課題を負わねばならない。この課題は、一般的には、歪められたコミュニケーションの批判と解された限りでのイデオロギー批判、さらには日常性批判をその射程のうちに収めることになる。J・ハーバーマスという名に容易に結びつけることのできるこの解釈概念、つまり意味論的レベルへの批判的還帰という契機を検討を、私は次の機会に譲らざるをえない。

しかし、それを解釈概念の第三の限定として示しておくことは、ここでの私の主題を多少なりとも鮮明な見取図の下に収めるのに役立つであろう。この第三の限定は、(容認された意味論的条件の下

での)偽装された真理と解釈という対立軸を形成する。このことは、解釈概念が、すでに妥当している意味論的レベルでの真理性基準に、常に批判的に介入しうる可能性のうちに確保されねばならないことを意味する。それゆえ、ここで問題なのは、容認された意味論規則の下での真偽の区別ではなく、真であるためのその条件を満たした偽装された真理であるがゆえに、先の可能性は意味論的なレベルでの真理概念の解明ではなく、別のレベル、ハーバーマスによれば遂行論(語用論)的なレベルでの真理概念の解明を要請することになる。したがって、ここで扱うことのできない見取図の半面とは、真理の合意説(Konsensustheorie der Wahrheit)に拠りつつ展開される、ハーバーマスの解釈概念なのである。

## 2

## リクルールの解釈概念

リクルールの解釈概念は、彼のテキスト理論から引き出される二つの主要なテーゼから構成されており、テーゼはまた更に四つの疎隔概念によって基礎づけられている。第一のテーゼは簡単に「志向性からの解放」と呼ぶことができるが、これはテキストの意味がその著者の意図(intention)から独立した理念的なものとして同定されることを意味する。したがって、このテキストの意味論的自律性

(semantic autonomy) によって、解釈の目指す意味は主観的な著者の意味 (author's meaning) ではなく、著者の有限な志向地平を超出する客観的なテキスト意味 (text meaning) ということになる。<sup>(3)</sup> 第二のテーゼは、ここでの主題にとって最も重要な解釈概念の契機であるが、これも簡単に「現実指示からの解放」と呼ぶことができる。これは、テキストの指示するものがもはや現実世界の<sup>(4)</sup> 実在ではなく、一次的指示作用のエポケーによって可能となる或る可能世界であることを意味する。<sup>(5)</sup> したがって、解釈の本来的な読解作業は、その二次的な指示作用を充実にすることにある。<sup>(5)</sup>

さて、これらのテーゼを支える四つの疎隔は、言説 (discours) の本質的な四肢構造「話し手が、何ものかについて、聞き手に、何事かを語る」に対応して発生する。その理由は、リクールによれば、言説が対話状況のなかで実現されずに、文字言語によってテキストという外在的な姿に刻印されるからである。<sup>(6)</sup> したがって、解釈はそもそも対話的なコミュニケーションの挫折から出発し、読み手とテキストとの間に準一対話的な状況を再現させることを課題とする。

第一の疎隔は、「語られている事柄」に関係し、言説が対話状況のなかでは常に時間的な一回性の出来事として生ずるのに対し、テキストはまさにその言説を固定化する、つまり「志向的に外在化する」<sup>(7)</sup> という点に発生する。リクールの言うように、言説は常に出来事として生じながらも意味として理解されるのだとすれば、<sup>(8)</sup> テキストが固定化するの<sup>(8)</sup> は意味としての言説、つまり言説のなかで述べられた何事かである。彼はこれを「語りのノエマ」<sup>(9)</sup> と呼んでいるが、この事態は、出来事としての言説

をその理念的な意味が超出することを意味する。ところで、この語りのノエマとは具体的には何か。彼は、言語行為論に拠りつつ、言説の意味として同定されかつまた再同定されるのは、命題行為の相関者たる命題内容のみならず、発語内行為および発語媒介行為のレベルでの相関者をも含めた、proposition, force, effect の総体であると述べている。<sup>(10)</sup>

第二の疎隔は、話し手というより「話し手の意図」の側に発生する。対話状況では、話し手は直接その場に現前し意味創出の起源として同定される。つまり、言説は、その表現手段の様々な装置、例えば人称代名詞等のエゴセントリックな手段によって話し手自身を指示し、言説の意味は直接に話し手の意図に送り返される。この状況では、話し手の意図を理解すること、言説の意味を理解することとは同一のことである。<sup>(11)</sup>しかし、言説がテキストという状態で実現されると、この一致は話し手への指示の不成立によって維持できなくなる。したがって、テキストでは著者の意図とテキストの意味は切り離され、著者のこの心理的および物理的不在という点に疎隔が発生する。

さて、この第一と第二の疎隔が、リクルールの第一テーゼ「著者の志向性からの解放」を基礎づける。それと同時に、テキスト解釈の最終目標を著者の思考や生の迫理解・迫体験とするロマン主義的解釈概念は、決定的に破棄されることになる。しかし一方で、著者の意図という基準を失った解釈相互の争いは、解釈者に相対的な終りなき正当性の闘争、結局は一種の懐疑主義へと連れ戻されるのではないか。しかし、この揺れ戻しは、テキスト意味が常に同一のものとして同定される理念的なもの

であるという、テキスト意味の客観性の主張によって歯止めがかけられている。つまり、解釈の複数性を認めることが決して意味の複数性を容認するのではない限り、妥当な (valid) 解釈というものが存在するわけである。

第三の疎隔は、「語られるもの」の側に発生する。リクールによれば、言説は全体として或る世界を指示するが、対話状況において指示されるものは、究極的には対話者間に共通する一つの状況である。<sup>(12)</sup>「究極的には」と言う意味は、対話での指示行為の依拠する時空のネットワークが最終的には対話者の位置を原点としている、というだけではない。それは、言説の展開する指示の連鎖が、指し示すという行為を通して、対話者の位置する状況に直示的 (ostensive) に結びつけられることによって常に完了しうることを意味する。<sup>(13)</sup>したがって、対話状況では意味は実在へと向かい、この指示の運動は直示的指示という身体行為によって最終的に担われることになる。しかし、テキストにおける言説は、まさにこの話し手による直示的指示を欠いているのである。しかし、それは、テキストがもはや指示運動を展開しないということなのか。リクールは、逆に、この実在の直示という一次的指示からの解放こそがテキストに固有な二次的指示の運動を可能にするのだ、と主張する。<sup>(14)</sup>しかし、実在を指示しない指示とは一体何を指示するのか。それは、もはや対話を取り囲む何らかの環境世界 (Umwelt) ではなく、実在の指示連関から解放された一つの可能世界 (a possible world) である。<sup>(15)</sup>彼はこれをハイデガーの投企された世界 (Welt)、ないしはフッサールの生活世界 (Lebens-



well) の新たな次元の意味に解する。<sup>(16)</sup>

最後の第四の疎隔は、残された「聞き手」の側に発生する。そしてこの最後の疎隔に至って、対話状況の限界性はテキストによって決定的に超出される。対話状況における聞き手が常に二人称の「あなた」に限定されているのに対し、テキストの対面者は読解能力をもつ全ての潜在的な読者であり、テキストは不特定多数の解読に身を開いている。<sup>(17)</sup> このことは、一方で、テキストが最初に置かれていた社会的・歴史的な文脈からの解放、つまりテキストの脱・文脈化 (décontextualisation)<sup>(18)</sup> を意味し、他方では、テキストの同時代者をもつ擬似・対話的な特権を無効にする。テキストという形式での言説の真の実現がその解読によって完了するものだとなれば、解読の無限の更新可能性こそは、テキストを決定的に一回性の出来事から分ち、したがって、出来事のはめ込まれた状況への指示連関からテキストをもぎ離すものと言うことができる。

以上の第三と第四の疎隔は、先ほどの第二テーゼ、「現実指示からの解放」を準備する。テキストのなかで実在への指示が中絶させられる場合、どのような解読の態度が可能であろうか。一つはこの次元に留まり、テキストを世界なき閉じられた意味記号の体系とみなし、一切の指示的問いを封じたまま、意味構造の内的連関を明らかにすることである。今一つは、この指示の中断から更に二次的指示の運動を再開し、意味から指示へとテキストの志向する道ゆきに従い、その指示志向を充実することである。前者の解読態度は、リクルールによれば、示差による構造モデル的なテキスト説明にすぎ

ず、解釈の本来の作業は後者の指示充実的読解にある。したがって、この第二テーゼは、差異の対立系を説明するに留る構造主義的な解釈概念に対するアンチ・テーゼであり、解釈の問題を意味(sense)ではなく指示(reference)の問題として捉える、彼の解釈理論の基軸をなしているのである。

### 3 ——— 可能世界指示としての解釈概念

さて、以上のようなリクルの解釈概念に批判的な検討を加えることによって、私は、解釈学が直面せざるをえない一つの状況を明らかにしたい。以下にその検討のあらましを述べておこう。

まず、意味を指示決定の十分条件とする「内包主義」<sup>(19)</sup>を取る限り、四つの疎隔概念は可能世界指示の成立根拠とはなりえない(3節)。それゆえ、内包主義の放棄によって、同一の意味から二つの指示を分裂させねばならないが、その分裂の正当化のためには、テキストのたんなる意味論的条件とは別の、何らかの「理論」の真理性が必要となる。しかし、理論の真理性請求を介したこの強い意味での指示充実は、結局、特定の理論内実のコミットする存在論に吸収されざるをえず、そこで「解釈の理論」の独自性は失われてしまう(4節)。したがって、解釈概念の独自性を失うまいとするなら、解釈学は、真理請求と同時に理論による指示充実をも自ら放棄し、弱い意味での指示、つまり指示充

実への運動としての解釈概念に踏み留まらねばならない（5節）。

さて、内包主義を前提すれば、リクルールの第一テーゼ（意味テーゼ）と第二テーゼ（指示テーゼ）の間には調停困難な亀裂が入ってしまうことを示そう。この第一テーゼに拠れば、一つのテキストには同定可能な一つの客観的意味しか本来認めるわけにはいかない。他方、リクルールは、指示の充実が対話およびテキストを含めた言説一般の本質構造であると解している。すると、今、かりに現実への指示を充実している対話がテキスト化された場合、そのテキストの指示はどうなるのか。両者に意味上の相違が生じないとすれば、対話状況では現実指示へ向かう同一の意味がテキストでは可能世界を指示するということになり、同一の内包が同時に異なった外延を指示するという、内包主義にとって到底受け入れ難い帰結を伴ってしまう。この場合、テキスト化によって意味の同一性は保てなくなる、と反論されようか。しかし、それでも事態は改善されない。なぜなら、現実指示をもともと目指した記録文書というテキストもまた存在するからである。その場合、「ルイ十六世は一七九三年に断頭台で処刑された」という記録文は（それが事件を指示するとするなら）、現実のルイ十六世その人に生じた歴史的事件ではなく、何かある可能的世界の出来事を指示する、とは言えないであろう。ましてや、昨日の新聞の記事でさえすでに現実世界への指示を中断しているとは考えられない。また、対話状況では指示は直示行為によってのみ果たされると言うとしても（これはほとんどラッセルの「見知りによる知識 (Knowledge by acquaintance)」なみの指示概念の狭きであるが）、その直示

行為の欠落したテキストでなぜ意味から指示の運動が可能となるのか。もしもテキストのなかでこの運動が可能なら、この運動を可能とする意味はすでに対話のなかでも可能世界への指示を行っていたはずであり、またもや、ここで同一の内包が別々の外延を指示していることになる。したがって、現実指示を直指言説がテキスト化される可能性を認めるなら、意味の同一性は決して可能世界への指示と両立しない、と言わざるをえない。

私は、リクールがテキスト概念の下でもっぱら小説や詩といったフィクションを考えている、という点を故意に無視しているわけではない。そこで、あらかじめフィクションとして書かれたテキストのことを考えてみよう。この場合、どの特定の時代でもなくどの特定の場所でもないテキストの世界というものは、確かに（特定の舞台を指定したフィクションを除いて）、この現実世界のなかに同定指示できるものではない。しかし、ノン・フィクションの指示と対比すれば明らかな如く、フィクション・テキストの指示が現実指示の失敗としてたんに片づけられるのではないのは、テキストがそれ自身のなかにフィクションであることを示す何らかの標識を備えているからに他ならない。この虚構標識は、「昔々ある処に」<sup>(20)</sup>というきまり文句であっても、また文庫本につけられた「S」なる記号であっても構わない。問題なのは、かりにテキストに虚構指示 (fictional reference) を（どんな意味であれ）認めるとしても、それが可能なのは虚構標識という意味論的条件に依拠してのことであって、あの四つの疎隔条件によってではない、ということである。実際のところ、リクルールの提起する

テキストの可能世界指示の問題は、この限りでは虚構指示一般の問題であつて、彼のテキスト概念および解釈概念から十分な説明を期待することはできない。それは、「ナポレオン・ボナパルト」といった固有名がテキストのなかでも現実指示 (real reference) を行い、「サンタ・クロース」や「桃太郎」が対話のなかでも虚構指示を行うことを考えれば明白である。さらに、「もしも私がそこに居たら、……」という反事実的条件文は、リクルールの指示概念からしても、対話のなかですら可能的状況<sup>①</sup>を指し示しているのではないのか。

さて、逆に第二テーゼに従い、テキストの指示が可能世界指示だとすればどうなるのか。一方で、テキストの読解は、リクルールによれば、脱一文脈化されたテキストを読者の世界のなかで再一文脈化すること、言いかえればテキストがその状況と聴衆を獲得することである。すると、読解の無限の更新可能性とは、それぞれの読者の世界の文脈に応じてテキストが再一文脈化され、それぞれに応じた可能世界を開示することに他ならない。しかし、この場合も意味が指示確定の十分条件とするなら、解釈の相違は各文脈ごとでのテキスト意味の相違に他ならないが、テキスト意味の理念的同一性を主張する第一テーゼによれば、その相違は意味の誤解<sup>②</sup>という次元に押し下げられざるをえない。しかしそうになると、そのつどの解釈が解釈者の状況に対してもつ意義と固有性、つまり同一のテキストによる様々な可能世界開示、あるいは「世界の提起」、「自分自身の可能性の投企」<sup>(21)</sup>という次元はどうなるのか。なぜなら、解釈の相違がたんなる意味の取り違えという次元で生ずるのだとすれば、解釈者

と、そのつどの疎隔によって可能となるそのつどの再一文脈化は、もはや解釈の積極的な側面としての固有性を構成しえないからである。したがって、解釈ごとの様々な可能世界指示という第二テーゼは、第一テーゼとは両立しない。むしろ、第二テーゼの要求するテキスト意味とは、ハーシュが著者の意味に対立させた、解釈者に対するテキストの有意義性 (significance) に対応するように思われる。<sup>(2)</sup>つまり、テキストが著者の意図を越えたそれ独自の運命を辿るということに重大な意味を認めるとすれば、そこで問題となっているのは、読者のそれぞれの文脈にとって同一のテキストが様々な意味性の連関に立つということであって、第二テーゼは、テキスト意味としてこの有意義性の複数性を含意せざるを得ないのである。

しかし、最も問題なのは、テキストがある可能世界を指示するという主張そのものである。この点で、リクールはかなり楽天的である。彼はテキストの指示について次のように述べる。

「こうしてわれわれがギリシャ『世界』について語るとき、それは、それを生きた人々にとって状況が何であつたかを示すためではなく、最初の指示が消えた後に存続する、状況的でない指示を示すためなのである。それら非・状況的指示は、以後、可能的な存在様態、われわれの世界内存在の可能的な象徴的次元として、提供されることになるのである」。<sup>(23)</sup>

この前半で述べられている「状況的でない指示」とは何か。かりに、ソフォクレスの『オイディプス王』がかつて実在した人物や場所についての物語であつたでしょう。このとき、『オイディプス

王』の登場人物や都市はそれらの実在した人物・場所を指示している、と言えようか。この場合でもそうは言えない、というのがリクルの答えである。したがって、その町「ターバイ」もかつて地上に存在したギリシャ世界の一都市を指示するのではなく、「オイディプス」や「イオカステ」もかつてそのモデルとなった実在の人物を指示するのではない。それでは、それらは何を指示し、その可能世界とはいかなる可能世界なのか。この問いに対し、結局のところリクルは、その世界とはテキストの文がそこですべて真となる世界、つまりオイディプスなる人物が父を殺害し母を娶ること、等が真である世界、と答える他はないように思われる。しかし、この場合、リクルの意図が明らかに様相概念の分析といったものにはない以上、テキストに書かれてあることを真であることとみなすことに加えて、更に、テキストはそれらの事態が成立している可能世界を指示する、と言うことにどんな意味があるのか。<sup>(24)</sup> つまるところ、この可能世界指示は、「虚構の対象」の復権を目指し、「それらをテキスト空間の中の存在者として有意味に指示し、語ることができる」とする、言わば反物理主義的な指示の理論の一部でしかない。<sup>(25)</sup> しかし、この種の反物理主義的な指示の理論では、テキストで記述されるいかなる人物・対象もその限りで指示される、というにすぎないのであるから、ここで解釈とはそのような指示の認容を虚しく宣言する以外のものではない。それゆえ、この平板化された解釈概念の下では、テキストが可能世界を指示するとは、テキストをフィクションとみなすということ以上のことを語っているわけではない。

しかし、先のリクールからの引用の後半部分、非・状況的指示がハイデガーの世界内存在の可能的様態、ないしフッサールの生活世界の一次元を開示する、という点を私は忘れ去っているのではない。しかし、実は、この点でこそ私の疑念は頂点に達するのである。かりに『オイディプス王』のテクスト全体が、そこで述べられた事態の成立する可能世界の中に、あるいはそれを通して、あるいはそれを越えて、世界内存在の一樣態を指示しているというのであれば、一体その指示の成立条件は何なのか。先の虚構指示のたんなる認容以外に、いかにしたらそうした指示に到達したと言えるのか。トムプソンの言うように、リクールはこの決定的な点について満足すべき答えを何も示していないのである。<sup>(26)</sup>

## 4

## 理論の真理性請求と指示

以上のように、テクストの同定された意味が指示決定の十分条件であるとする内包主義を取る限り、四つの疎隔条件では、リクールの可能世界指示を十分に確定することができない。それゆえ、指示充実としての解釈という彼の意図が満足されるためには、同一の意味が、何らかの理由で、その指示を字義通りの指示と隠された別の指示へと分裂 (split) させているのでなければならない。このよ



うな場合にこそ、解釈は指示充実という課題を平板化されていない真正のものとして引受けることができる。この二分された指示 (référence dédouble) の典型例を提供するのは、精神分析学の扱う領域である。例えば、幼児期神経症の患者が見た不安夢の報告、「窓の向こうの大きくなるみの木に一對ずつ白い狼が坐っているのを見て、私はびっくりしました。……彼らは真白で……狐みたいな大きなしっぽをもち、……。この狼達に食べられるのではないかという非常な不安に襲われて、……目が醒めました」(註)の中の「狼」は、フロイトによれば、父親を指示し、夢全体は父親への恐怖(と同時に父親への性的願望)を示している。ある箇所で、リクールは、作品によって呈示される存在とはわれわれの最も深い真実であり、また再認識された本質であるという意味のことを述べているが、こうした夢のテキストこそは、われわれの直接の理解から隠された真理を示すものだと言えよう。したがって、例えば『オイディプス王』のテキストは、そのような意味で、人間の性の欲望と死と抑圧について、の古くからの真理をわれわれに語りかけているのであろう。

ここで重要なことは、解釈さるべきテキストが、すべて当該の対象領域についての通常の意味論規則(概念組織)に表面上従っていないながらも、なおその規則から逸脱した指示を行っているということである。それゆえ、当該の意味論規則はその支配する対象領域の事実に対して十分な表現手段を与えていない、ということがここに含意されている。この言わば表現可能性の不充足という事態の下では、当の意味論規則に従っていても、例えば一般化しうる関心とか公認さるべき欲求とかを、言語と

いう媒体に変形することが妨げられているのである。それゆえ、この構図の下で、解釈の果すべき作業は初めて明確になってくるように見える。それは、意味論規則からの逸脱による、表現可能性の充足化に他ならない。

リクールの解釈概念が、意味論の病理学というハーバーマスの解釈概念と接するのは、この地点である。両者ともに、ある種の意味論規則が一定領域の対象に対して表現可能性を充足させていないという前提から出発するが、両者のテキストに対する視角は、ちょうどメダルの裏表のような関係になっている。リクールの場合、この状況前提から、テキストは意味論規則の裏をかくことによって、これまで表現されなかった対象を指示している。意味論規則からのあからさまな逸脱という戦略の違いを除けば、それは隠喩の新たな出現に比されよう。それに対し、ハーバーマスの場合では、テキストはそのような指示を成功させてはいない。なぜなら、規則からの逸脱が新たな指示を達成するところか、ここでテキストは、シンボルの私的な歪曲という病的な現象（言語の私物化）<sup>(28)</sup>によって、むしろその指示を公共のコミュニケーションから隠蔽するからである。それゆえ、リクールにとってテキストが指示を成功させそのことによって実在を「創出する」のに対し、ハーバーマスにとってテキストは指示を不発にさせ、実在への接近を抑圧するものとなる。したがって、一方で解釈は容認された意味論規則からの逸脱を正当化することを課題とし、他方では、いまだ逸脱されざる規則の不当性を批判することが課題となる。しかし、このことは解釈概念にとって正確には何を意味するのか。

リクルールにとって、解釈がテキストに記述された限りでの対象への指示を追認するという平板化されたものでない限り、それは、暗示（あるいは隠蔽）された対象への指示を明示化するという、テキストの読み換え作業となる。しかし、この読み換えの妥当性はいかにして保証されるのか。言い換えると、あの夢のテキストではなぜ「狼」が父親を指示し、「狐みたいな大きなしっぽ」が去勢コンプレックスを指示すると言えるのか。いずれにせよ、われわれの出発点はテキストの意味であり、しかもそれは同一のものとして同定されねばならない。しかし、この同一の意味が隠された指示を分裂させる理由は、あの四つの疎隔条件のなかには見出せないし、ましてやテキストの意味自体のなかにそれが含まれているわけではない。したがって、指示分裂の根拠は、テキストの意味論的条件以外に求められねばならない。それは、同定された意味（狼）から指示充実（父親）に向かう間に生じた、何らかの「理論」の介入である。そして、この「理論」がテキストの読み換え作業に示唆と根拠を与えるのである。

この事情は、精神分析学的状況では、表現可能性の充足という点で、当該の意味論規則がいかに評価されるかを考えれば一層明瞭になってくる。われわれは、この評価の基準を、患者たちの織りなすテキストの意味論的条件のなかに見出すことができない。この状況で解釈を発動させるためにわれわれが引き合いに出すのは、むしろ、精神分析学の理論的内実そのものである。つまり、「転移」や「検閲」や「抑圧」といった精神分析学の概念装置の先取りが、初めてこうした状況を解釈の適用

しうる状況に仕立て上げているのである。したがって、解釈の妥当性のために精神分析学的状況に訴えることは、精神分析学の提起する「欲望の意味論 (sémantique du désir)<sup>(29)</sup>」に訴えることであり、そのことは結局、一連の意味論規則は他の一連の意味論規則との比較によってしか評価しえないことを認めることに他ならない。つまり、特定領域での表現可能性の不充足は、何らかの説明理論の形成によって初めて見出されるのであって、そのような説明理論の内容と独立に知られるわけではないのである。

それゆえ、指示の分裂は、従来の意味論規則の下での指示の成功と述定の妥当性による真理を越えた、上位の「真理性」を要求するように見える。この点で、解釈がまず暗示された指示を露わにし、それからその新たな実在についての真理が理論として語られる、というのは事の真相ではない。むしろ逆に、真理性を請求する理論によって初めて、解釈はテキストに秘められた指示を明示するのである。しかし、そうであるなら、この解釈概念は、平板化されていない強い意味での指示充実という作業を特定の理論内容の真理性に従属させ、そのことによって自ら、その理論の要請する存在論に吸収されてしまうのではないか。すなわち、この意味での解釈は、科学理論上の理論概念、例えば「ブラック・ホール」(や、かつての「フログストーン」)に対して実在論的態度を取るというのと、同じ次元にまで切りつめられてしまうのではないか。

このことは、精神分析学の妥当性やその理論としての性格がどうあろうと、関わりがない。なぜな

ら、解釈学とは精神分析学に他ならないという極端な主張をするのでない限り、精神分析学と解釈学の特異な関係性は（それが何であれ）、<sup>(30)</sup>「解釈」そのものが何であるかという私の問いには関係がないからである。したがって解釈概念が強い意味での指示充実である限り、解釈とは、公認の意味論規則を、当該の対象領域についての何らかの説明理論が提供すること以上のことを意味しえない。それゆえ、則によって容認される指示を實在の指示として受容すること以上のことを意味しえない。それゆえ、解釈概念の基礎づけとして精神分析学を引き合いに出すことは、精神分析学の理論的妥当性はどうか、<sup>(31)</sup>「数学化された自然」を真の實在と主張するために近代の物理学理論を引き合いに出す、「物理学の客観主義」のやり方と選ぶ所はないのである。

## 5

# 結論・指示への運動としての解釈

解釈問題を指示問題とするリクルールは、ここで一つのディレンマに直面せざるをえない。なぜなら、テキストが真理を伝えるとする限り、指示は最終的には實在論的（現実指示的）でなければならず、逆に指示を反一實在論的（虚構指示的）に解するなら、テキストは真理性請求を放棄せねばならないからである。<sup>(32)</sup>それゆえ、解釈が一次的指示のエポケーによって可能となる二次的指示の充実であ

るとしても、それがテキストに記述された限りでの対象への虚構指示であるなら、3節で見たように、解釈そのものは、真理性請求から自由な、テキスト上の存在者の容認という極めてトリヴィアルなものであらざるをえない。他方、この平板化された解釈概念から脱し解釈を強い意味での指示充実とするのであれば、意味から指示への道を分裂させねばならないが、この分裂の妥当性のために解釈は何らかの理論の真理性請求に訴えざるをえない。しかし、真理性請求へのこの迂回によって、解釈はその特定の理論的内実の真理性に従属し、その結果、指示に関しては、特定の理論<sup>プラク</sup>＋実在論にまで解釈概念が薄められてしまうのである。したがって、一方では解釈はそのトリヴィアリティのゆえに独自の価値を失い、他方では理論への従属ゆえに独自性<sup>ユニクネス</sup>そのものを失うのである。

ここから私は、リクールの解釈概念の挫折よりは、むしろ今日の解釈学的試みが直面せざるをえない一状況を引き出したいと思う。リクールにおける解釈と指示と真理の関係性の原基は、彼の隠喩理論のなかに見出されるが、そこにこの状況が象徴的に示されている。隠喩は何よりも、(1)既定の意味論規則からのあからさまな逸脱を(多くの場合)含みながらも、(2)無意味どころか特定の真理内容を表現し、(3)しかもそれは「意味論的革新」<sup>(33)</sup>として既定の表現への完全なパラフレーズを拒むという点で、リクールにとって解釈のモデル・ケースとなっている。人が隠喩を用いるのは、生きた隠喩の力によってしか表現しえないことがあるからである。そして、「隠喩の力とは、以前の範疇化をうち破って、前の境界の廃墟の上に新しい境界を敷設するもの」<sup>(34)</sup>である。それゆえ、隠喩は字義通りの意味

に基づく通常の真理を要求しえない代わりに、「新たな真理」の開示を本義とするのである。しかし、もし「概念的原型 (conceptual archetype)<sup>(35)</sup>」として働く語彙や表現法などない領域での「事実」を伝えようとするなら、われわれはいやでも手持ちの意味論的素材に頼らざるをえない。ここでは隠喩は不可避免的であるがゆえに、字義通りの真理を要求しうるように見える。リクールがマックス・ブラックやメアリ・ヘッセのモデル論に訴えて、科学理論におけるモデルの諸特性（生産性、不可避性、再記述性、発見性、等）を隠喩に確保しようとするのも、この場面である。科学理論上のモデルが何らかの認識内容を担うように、隠喩も何がしかの認識価値を有する。しかし、更にはそれについて認識なのか。隠喩によって露わにされたのは、新たな実在<sup>(36)</sup>についての真理である。しかも「私の企てはすべて、外示 (denotation) を科学的言表だけに限定するのをなくそうとするとともにある<sup>(36)</sup>」。それゆえ、リクールにとって、いかなる隠喩の意味も指示への運動を再開する。すなわち、「隠喩的解釈は、……言表の字義通りの解釈に相当する指示を廃するのを利用して、新しい指示的志向をも生じさせる、と言えないだろうか。……隠喩的な意味が隠喩的な指示作用に対応するのは、ちょうど不可能な字義通りの意味が不可能な字義通りの指示に対応するのに等しい<sup>(37)</sup>」。

すると、少なくとも隠喩というこのすぐれて意味論的な出来事のレベルでは、解釈の独自性は、いかなる特定の「理論」も介さずに、むしろ隠喩の真理と指示という意味論的条件だけによって根拠づけられるのではないか。しかし、まず第一に、隠喩に真理の開示という役割を越えて真理そのものを

認めることは、隠喩にとって自殺行為なのである。それは、隠喩が隠喩としてあるのは字義的表現という地の上の図としてしかありえない、という単純な理由による。それゆえ、隠喩をパラフレーズされない字義通りの文のまま真とすることは、それから隠喩の資格を奪うことに他ならない。隠喩の存在理由やその認識価値についての評価には争う余地があるとはいえ、かりに字義的・隠喩的という区別を認めるなら、われわれはデイヴィッドソンの単純強力な論点から逃れるわけにはいかない。すなわち隠喩まじりの文に通常の真偽を問うなら、たいていの場合それは偽なのである。<sup>(38)</sup> また逆に、普通それを偽と受け取る時にのみ、われわれはそれを隠喩として扱う用意をするのである。未知の言語を習得する場面にある人物にとっての隠喩という、デイヴィッドソンの例を考えてみよう。<sup>(39)</sup> 習得の過程で、例えば語「狼」がたまたま人間に対して隠喩的に用いられた時、それを文字通りの真として受け取る限り、彼にとって「あれは狼だ」は隠喩ではない。彼にとって、「狼」の字義通りの意味のバリエーションが増えたにすぎない。ちょうど、死せる隠喩がその起爆力を失うのと引きかえに、意味のレパートリーを増やすように。同様に、新たな科学理論の領域でも、隠喩が端的に真であるとされるなら、それはもはや隠喩ではなく、隠喩に用いられた語の適用範囲が拡大されたのである。それゆえ、隠喩の役割は（それをどう考えようと、それに独自の価値を認める限り）、いかなる意味でもそれ自体の真理という要求とは相容れないのである。

しかし、それでは第二に、認知心理学に果たすコンピューター・サイエンスからの隠喩の役割を積



極的に評価し、理論構成的隱喩 (theory-constitutive metaphors) に発見的機能のみならず指示的機能をも認める、科学的事実論者ポイドのような論点はどのようなのか。<sup>(40)</sup>ここでは、隱喩は隱喩のままに、実在を指示するのではないのか。しかし、実はこの場合でも、隱喩の新たな指示が決定されるのは、隱喩を含んだ新たな理論の成否なのであって、<sup>(41)</sup>その理論から独立した解釈という特別な作業ではない。すなわち、「生命力 (vital force)」のような隱喩が不発に終り、「フィードバック」のような隱喩に指示対象が与えられるとすれば、それは、人間の認知過程と機械の計算過程に或る種の類似性を主張する「理論」の眞理性に依存するのである。それゆえ、一言にして言えば、隱喩は隱喩ではない。

もちろん、以上のことは、「世界を別様に眺め」、古い存在論的枠組からの脱出を図るという機能をも、隱喩から奪うものではない。むしろまったく逆に、私の結論は、隱喩、ひいては解釈がこうした独自の批判的創造的働きとして純粹にその力を保持すべきなら、眞理と理論による指示充実という要求を自ら棄てざるべきだということである。われわれが先のリクールのディレンマから得る教訓は、解釈の独自性のためには、眞理請求と強い意味での指示充実としてではなく、むしろ弱い意味での指示として、すなわちいまだ眞理ではないが眞理へ向かう運動として、意味から指示充実への運動として、解釈は踏み留まるべきだということである。解釈のこの危うい境位は、「 $\wedge$ でない $\vee$ を $\wedge$ である $\vee$ の中に保存する隱喩的眞理」<sup>(42)</sup>としてリクールによって表現され、また「隱喩は眞理への適中であ

るより、むしろ真理の辻褄合わせにすぎない」として菅野氏によって表現された場に存する。<sup>(43)</sup>

しかし、この状況は、たんにリクールの隠喩理論と解釈概念にだけ固有なものではない。なぜなら、すでにローティによって、解釈学そのものに対して、理論構築的な体系的哲学としての夢を捨て、常に批判と風刺とパロディによって対話を遂行し続ける陶冶哲学 (edifying philosophy) たるべし、との要求がつきつけられているからである。<sup>(44)</sup> 西欧哲学の脱構築と解釈学的転回というローティの思想をどう評価するにせよ、ここには解釈学的試みが避けて通ることのできない関門が待ち受けている。<sup>(45)</sup> そして、われわれが1節で提示した多くの限定の下でのリクールの解釈概念も、また、理論構成と真理性請求を自らの誘惑として斥けることができる時にのみ、硬直化した意味論的枠組の批判とそこからの脱出という課題を、その独自の存在理由となしえたのである。この意味で解釈学は、革命的政治家というより革命的テロリストの地位に永遠にとどまり続ける。